



## 「イエス様に助けを求めなさい！」

～光なる主を見上げて歩み続ける！～

「愛はだれにも悪を行ないません。だからこそ、愛は神の要求をすべて完全に満たすのです。愛こそ、あなたがたに必要なただ一つのおきてです。」 「当然なすべき正しい生活ができるように、主イエス・キリストに助けを求めなさい。…」

ローマ人への手紙13章10・14節[リビングバイブル]

大河ドラマの「西郷どん」の撮影は終り、ストーリーも親友だった西郷と大久保が敵対関係になってしまうという状況で、最終話に近づきつつあることをほのめかしています。

それにしても、明治新政府を立ち上げていくということは本当に大変な状況だったことがよく分かります。雰囲気も暗く、同じようなことを繰り返しているだけで、全く前に進んでいかに見えます。しかし、150年が経過して今のような社会が作り上げられているということから考えていくと、本当に先人たちは苦勞しながら、どうにかして今の状況を変えていこうという思い一筋に、希望を抱いて、取り組み続けたのだらうと思ひ、彼らを心から尊敬します。

AD67年、一人の伝道者がその命を懸けて愛を伝えた。映画「パウロー愛と赦しの物語」が上映開始となりました(長野県では今の所上映予定はありません)。人類史上最強とされていたローマ大帝国に対して立ち向かった主の勇者パウロ。しかし、彼はローマに立ち向かっていただけではなく、キリストを伝えたただだった。その結果、大帝国ローマが彼らを脅威と感じ、敵視し、命をねらうようになった。

「正しい生活をしなければならぬ、もう一つの理由があります。それは、今や終末に近づいており、時はどんどん過ぎていくからです。目を覚ましなさい。初めに信じたころより、今はいっそう主の来られる時が近いのです。夜はふけ、昼がすぐそこまで近づいています。ですから、暗闇に属する悪い行いを捨てて、昼間にふさわしく生きるため、正しい生活という武器で身を固めなさい。あなたがたの行為は正しいとだれからも認められるよう、何をするにも、りっぱに、誠実にふるまいなさい。…」ローマ13:11-13[リビングバイブル]

「昼がすぐそこまで近づいています」とパウロは語っています。ローマの支配、特に暴君ネロの時代はまさにカオス混沌、暗闇の真ただ中であつたと思ひます。しかし、彼はそのような暗闇の中にあつても、真昼のような希望と勝利の光の中を歩んでいたのです。それはまさに、彼自身が主イエス様に会った時のことをそのまま表現している内容です。彼は真昼の太陽よりももっと輝いた主イエス様の栄光の輝きに打たれてその人生が変えられました(使徒9)。だからこそ、彼の人生はじっとしてはいられない、冒険に満ちた歩みとなつたのでしょう。

私たちが光なる主をしっかりと見つめながら、この21世紀の信仰の道をしっかりと歩んでいきたいと願ひます。共に手を取り合つて主に従つていきましょう！